

ポローニア

paulownia

新しい春、附属学校の今



筑波大学附属学校教育局
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

vol. 9

発展の芽を広げる



副学長・
附属学校教育局長
谷川 彰英

AKIHIDE
TANIKAWA

平成19年度・20年度の2年間さらに教育長の職務を継続することになりました。各位のご支援・ご協力をお願いいたします。この2年は副学長として附属学校教育局長を兼ねることになりました。大学経営の一環としての附属学校運営を考えていくことになります。

この4年間で国立大学の法人化の混乱期と危機を一応クリアできたのではないかと考えています。しかし、附属学校の存亡にかかわる危機はこれからです。運営費交付金の減額はさらに続く見込みですし、それに合わせて附属学校の運営費も減額されていく運命にあります。この危機をどう乗り切ることができるかが最大の課題ですが、次の中期目標・中期計画にどう記述できるかがキーになってきます。

すでに昨年度より特別支援学校の将来構想は検討に検討を重ね、大きな方向性は確定しました。それに加えて普通附属学校の将来をどう構想するかが問われています。昨年の暮れから懇談会を重ねてきましたが、問題は深くそう簡単ではありません。しかし、この7月を目途に特別支援学校と普通附属学校の将来構想をリンクさせて大学全体の構想としてまとめていく必要があります。

昨今の我が国の教育はさきわめて由々しき状況にあります。教育界の実態に疎い一部の人々の思いつき程度の発言が世を揺るがしています。今こそ、筑波大学の附属学校に所属する教員たちが、この混迷する教育界に発言すべきです。その1つの手段として、『日本の教育フロンティア10の提言—筑波大学附属学校の挑戦—』を今秋出版します。筑波大学のそれぞれの附属学校がこれまでどのような貢献をし、今後日本の教育にどのような提言を行うかといった、いわば筑波大学附属学校にとって試金石のような本です。

附属学校を取り巻く状況は厳しさを増していますが、明るい材料もいっぱいあります。もともと、ピンチの時にこそチャンスはあると言います。皆さんの叡智を結集して附属学校の発展の芽を広げましょう。

目次

■巻頭言

発展の芽を広げる

●谷川彰英

■附属の今

附属の今（附属坂戸高等学校）

●大平典男……………1

■研究会・研究発表会

平成18年度筑波大学附属学校研究発表会報告●江口勇治……………2

平成18年度附属学校教育局春期研修会報告●熊谷恵子……………2

■アラカルト

特別支援教育研究センター春期セミナー……………3

「特別支援教育の最前線 第6回」●松原 豊

「新任教員の交流と懇親の夕べ」が開かれる●生田 茂……………3

附属特別支援学校新生プラン（Next 50）について●皆川春雄……………3

■温故知新

庸三の情熱を、今に●板橋安人……………4

■名物先生紹介

附属高等学校の名物先生—渡辺雅之先生—●高澤耕一……………4

■ご挨拶

次長に就任して●石隈利紀……………5

■指導教員の取組み

一步一步●生田 茂……………5

Whole school approach●篠原吉徳……………5

■トピックス

朝永振一郎記念「科学の芽」賞●小林 汎……………6

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.9
CONTENTS

附属の今(附属坂戸高等学校)

附属坂戸高等学校副校長 大平典男

昭和21年、戦後の復興は教育にありと考へた地域の人々が、子弟の教育のためにと熱い思いで組合立の高等学校を創設したことから本校は始まります。その後、昭和28年東京教育大学の附属高校となり、昭和53年に筑波大学へ移行しました。学校は東武東上線「若葉」駅近くですが、7万㎡の広々とした校地には自然がいっぱいで、時折「学校の里山」(研究用に作っている造林地)には雉や小鯉を見ることができます。

平成5年までは、四つの専門学科からなる専門学校でしたが、平成6年総合学科に改編し、選択制・単位制による柔軟な教育課程を持つ、個性尊重、キャリア教育重視の、21世紀型高等学校教育システムの研究実践に取り組んでいます。総合学科の必修科目「産業社会と人間」の科目開発を初めとし、多くの「坂戸方式」を全国に発信して、現在300校に上る全国総合学科高校の改編や新設に多くの影響を与え、総合学科のバイオニア校としての役割を果たしています。平成15年度からは第二次学校改革を行い、多様な選択科目と体験を重視し工夫を凝らした結果、他の学校にはない独自の科目など生徒に学ぶ楽しさや充実感を体験させ、その結果が将来の進路に

結びつくようにした新たな総合学科研究を進めています。生徒は「自由、自律、自覚」の生活目標を掲げて、何事にも誠意を持って取り組み、素直でいきいきとした学校生活を送っています。毎年2回実施される筑波大学の教育実習でも、授業を受ける生徒の態度や学校の雰囲気非常に良いと教育実習生から高い評価を得ています。

キャリア教育の実践研究では、平成12～14年度と平成15～17年度の2期連続で文部科学省「研究開発学校」に指定され、科目「産業理解」、「起業基礎」などの科目開発に取り組みました。そのため本校の教育課程には、他校には見られないキャリア教育のための3科目から構成された学校設定教科「産業」があります。1年次に「産業社会と人間」で自分自身を知り、「産業理解」で社会を見つめて将来の生き方を考え、2年次の「起業基礎」では社会に出てからのマインドを学びます。それらの学びの集大成として3年次では各自それぞれのテーマで「卒業研究」(課題研究)に取り組み、高校での学びをまとめます。また、キャリア教育研究の一貫として、大学との「高大連携7年プロジェクト」をスタートさせ、わが国の大きな教育課題である後期中等教育

「起業基礎」ポスターセッション



筑波大学農林技術センター ハケ岳演習林での特別授業 (高大連携7年プロジェクトチーム)



と大学教育との連続性をテーマに研究に取り組んでいます。プログラムでは大学はもちろん大学の学外施設、高校等で大学教員による授業が行われる予定で、多くの成果が期待されています。

生徒それぞれの「夢」を育て、社会の有用な人材として「志」を持って人生を切り開いていく人間力あふれる人材育成のための教育や研究に取り組んでいます。

平成19年度附属学校研究発表会等日程

附属学校教育局と各附属学校合同での研究発表会、及び各校の研究テーマを深めるための公開研究会を下記の日程で開催する予定です。是非ご参加下さい。

※各附属学校が会場となります。

区 分	研究協議会等開催予定日	附属学校研究発表会開催日
附属小学校	平成19年 6月14日(木)・15日(金)(研究発表会) 平成20年 2月14日(木)・15日(金)(初等教育研修会)	平成20年2月23日(土) (附属小学校 講堂)
附属中学校	平成19年11月10日(土)(研究協議会)	
附属高等学校	平成19年12月 1日(土)(教育研究大会)	
附属駒場中学校 附属駒場高等学校	平成19年11月16日(金)・17日(土)(教育研究会)	
附属坂戸高等学校	平成20年 2月21日(木)・22日(金)(総合学科研究大会)	
附属視覚特別支援学校	平成20年 2月16日(土)(研究協議会)	
附属聴覚特別支援学校	平成19年 6月21日(木)～22日(金) 関東地区聾教育研究会「聾教育実践研修会」 平成19年11月下旬 聴覚障害教育担当教員講習会(文部科学省、筑波大学共催) 平成20年 1月 聴覚障害早期教育公開研修会(特別支援教育研究センター後援) 平成20年 3月 筑波大学連携研究報告会(学系と附属聴覚特別支援学校)	
附属大塚特別支援学校	平成20年 2月15日(金)(研究協議会)	
附属桐が丘特別支援学校	平成20年 2月 7日(木)・8日(金)(研究協議会)	
附属久里浜特別支援学校	平成20年 2月 7日(木)・8日(金)(実践研究協議会)	

〔個別学力検査 前期日程試験:平成20年 2月25日(月)、26日(火)、後期日程試験:平成20年 3月12日(水)、センター試験:平成20年 1月19日(土)、20日(日)〕

平成18年度筑波大学附属学校研究発表会報告

附属学校教育局 江口勇治

標記大会は、附属小学校講堂を会場に平成19年2月24日(土)に開催された。これまでの大会とは若干装いを変え、下記のような内容で附属学校を中心とした研究成果の発表がなされ、活発な討論が展開された(学校の名称は発表当時のものを使用した)。

●大会テーマ; 社会と関わり、生きる力を育てる —言葉とコミュニケーションに焦点をあてて—

1. 研究発表

- (1) ライフスキルを高める高校生を対象とした心理学の授業
- (2) 子どもたちの学び合いを支援するツール

2. シンポジウム; 生きる力としての言葉を育てる

—普通附属学校・障害附属学校の実践から—

- ① コミュニケーションの発達を支援する(附属大塚養護学校)
- ② 生きる力としての「言葉の力」を育む国語授業(附属小学校)
- ③ 黒板を使わない数学・理科の授業(附属盲学校)
- ④ 体育授業で育むコミュニケーション能力(附属高等学校)
- ⑤ SSHにおける国語科の試み(附属駒場中・高等学校)

研究発表の(1)(2)は、いずれも附属学校教育局の18年度プロジェクト研究として取り組まれているもので、大会テーマを実践レベルで支えるものであった。(1)は局の指導教員である熊谷恵子氏、田中輝美氏、附属坂戸高校の平田佳弘教員によって紹介されたが、本発表は「子どもたちの生活に根ざしたカリキュラムのひとつとして心理学を効果的・



系統的に導入するための先導的研究」であり、これからの学校教育における新しい取り組みとして注目できる。また(2)は局の生田茂氏の指導もとで積極的に取り組まれている授業改革のひとつであり、発表では電子黒板の活用、情報を英語で学ぶカリキュラム、音声発音(再生)システムを用いた教材開発などが实际的に紹介された。いずれの研究も、今後の広がり実践でのさらなる展開が期待できる。

シンポジウムは局の石隈利紀氏の司会により、中村 晋、二瓶弘行、高村明良・武井洋子、貴志 泉、関口隆一の各教員より、テーマに関わった積極的な取り組みや実践が成果として発表され、鳥山由子附属学校教育局次長を指定討論者に加え、活発な質疑が行われた(それぞれの発表については当日配布の資料を参照のこと)。シンポジウムでは、「言葉の力」をいかに効果的に培い、生きる力へと転換させるかを巡って、それぞれの学校の特質や子どもたちの特性を生かした教育として展開できるかが实际的に示され、今後の各附属学校のひとつの方向性が論じられたようにも思われる。「言語の力」の教育は、必ずしも国語科に固有な問題ではなく、また教科に限定する必要もなく、幅広い論点から議論されるべきものであり、さらに総合的なアプローチを模索できるようにも感じた。附属学校を中心とした研究のさらなる飛躍を局の指導教員として祈念してやまない。指導教員の質も問われていることを痛感する次第である。

平成18年度附属学校教育局春期研修会報告

附属学校教育局 熊谷恵子

青山大学文学部教授の佐伯胖先生においでいただき、『学びの転換—「自ら学ぶ力」から「学び合う力」へ』という演題で、ヴィゴツキーの三角モデル(複合的な媒介された行為)およびエンゲストロームの活動理論による拡張による学習に基づき、主体が個別の行為を超え、「一人で学ぶ」のではなく、多様な子どもたちが共同の場で学ぶことの大切さについての論理的な講演があった。

さらに、附属学校教育局の田中輝美助教授からは、「教育相談の実際—キャリア形成に着目して」という演題で、実際に筑波大学心理・心身障害教育相談室にて、実施された具体的な事例が紹介された。この事例は、身体不調をきっかけとした一見ありふれた不登校にみえたが、登校にいた

るまでの作業において、「自分は何者か」というアイデンティティに関わる問題を探求し、この作業の中で自分の能力の限界を自覚し、受け入れ、将来についての自分なりのビジョンを得て再登校に至ったという、特徴的な事例であった。この事例から、自己理解、特に自分の限界に直面する作業を含むキャリアを意識させることの重要性について講演が行われた。



特別支援教育研究センター春期セミナー 「特別支援教育の最前線第6回」

平成19年3月26日(月)に附属小学校講堂において開催された今回のセミナーは、全国から約180名の参加者がありました。また、本センターのe-ラーニング事業の一環として沖縄県の八重山養護学校にも同時に配信されました。

前半は「情報とユニバーサルデザイン」と題して、毎日新聞社会部の野沢和弘氏の基調講演をいただきました。みんなが分かる新聞「ステージ」の制作体験を通し、知的障害がある人も含めた全ての人にとって分かりやすい情報発信について、多くの示唆に富んだ内容でした。

後半は「学校間あるいは関係機関との連携・移行について」というテーマでシンポジウムを行いました。附属聾学校からは「聴覚障害児乳幼児教育相談室の移行支援」、附属大塚養護学校からは「保育機関との連携による支援一併通園幼児の事例から」、附属盲学校からは「移行支援と連携一地域の小学校への就学・在籍をめぐる一」、附属久里浜養護学校からは「特別支援学校の連携・移行について～A君の事例を通して～」、附

特別支援教育研究センター 松原 豊

属桐が丘養護学校からは「通常学校等に在籍する児童生徒への支援における養護学校間の連携」と題して話題が提供されました。文教学院大学人間学部の綿祐二氏から、福祉の立場からの貴重なコメントをいただき、熱心なディスカッションが行われました。

特別支援教育では、障害のある人の乳幼児期から成人期に至るまでの、総合的な支援の重要性が指摘されています。今回のセミナーでは、総合的な支援のために、学校間及び機関間の連携・移行と関係者間の情報の共有が大切であることが確認されました。



「新任教員の交流と懇親の夕べ」が開かれる

2月20日に、昨年度、附属学校に赴任された先生の「交流と懇親の夕べ」を開催いたしました。新しく赴任された先生は、附属学校全体で28名でしたが当日は25名の先生が参加をしてくれました。

はじめに、谷川彰英附属学校教育局教育長から、筑波大学と附属学校の歴史、附属学校の今日的課題について、そして、附属学校研修委員会委員長(生田)から、研修委員会のこの間の取り組みの紹介がありました。

続いて、新しく赴任された先生から「自己紹介と筑波の附属

学校に来て感じたこと」、そして、新任教員の代表による各学校の紹介、その後、6-7名ぐらいのグループに分かれて、附属学校に来て

感じたこと、感じていること、附属学校の課題等の交流を行い、最後に、全員がもう一度集まって、それぞれのグループの話し合いの様子を紹介を行っていただきました。参加された先生から、他の附属の様子が分かってとてもよかった、新しく赴任された先生の思いを共有できてよかった、もっともっと他の附属の様子を知りたい、という声があがりました。

懇親の夕べには、(参加を予定していなかったが交流の会がとても楽しかった、と参加をしてくれた先生も含めて)20名の先生が残ってくれました。

新任の先生の交流と懇親の夕べは、附属学校教育局として初めての企画でしたが、参加していただいた多くの先生から「とても素晴らしい会でした」という声をいただきました。また、各附属学校の見学ができるようにして欲しいという要望もいただきました。

早速、今年度は、こうした声を実現させる努力を行いたいと思っています。

附属学校教育局 生田 茂



附属特別支援学校新生プラン(Next 50)について

附属視覚特別支援学校長 皆川春雄

本年4月より、我が国の障害児教育は特殊教育から特別支援教育に転換した。筑波大学は、これを視野に入れて、附属学校教育局及び障害科学系を中心に、平成18年4月以来「附属特別支援学校新生プラン(Next 50)」の検討を進め、平成18年7月に「中間まとめ」を、平成19年3月には「第一次報告」を公表した。

「新生プラン(Next 50)」は、これまで特殊教育が培ってきた特長を継承し、その限界を解消することにより、利用者尊重の原則に立ち、高度な専門性に裏付けられた、現有資源の有効活用による「筑波モデル」を構築し、国内外に発信することを目指している。改革の視点として、①障害の重度・重複化への対

応 ②障害種ごとの専門性 ③センター的機能の効果的な発揮の3つを掲げて検討してきた。具体的には、附属特別支援学校の再構築を図り、教科教育カリキュラムを中心とする特別支援学校と知的障害教育並びに重複障害教育を中心とする統合キャンパスを東京地区に新たに構想し、特別支援教育研究センターを同一エリアに設置してアセスメント研究、通常学校への支援モデル等を実践的に研究する。今後は、大学、各特別支援学校、通常教育学校等との密接で柔軟な連携の在り方を検討しつつ、夏頃を目途に第二次報告を纏める予定である。

温故知新

庸三の情熱を、今に

附属聴覚特別支援学校 板橋安人

明治時代の工業立国の父と呼ばれ、工学校（現、東京大学工学部）設立に尽力した山尾庸三（1837—1917）は、鎖国時代の幕末に伊藤博文らとともにイギリス留学中（1863—1868）に、活き活きと働く聴覚障害者の姿に触発され、その感動を実現したいと考え、帰国後、太政官に盲啞教育のための学校設置の建白書を提出した（1871年）。『職工中に啞者が居まして、熱心に働いていた。而して俺等には勿論誰彼にも極めて巧妙な指字を書きました。…あちらの啞者には、手指でいふのと、口でいふのと二通りの言葉がある様ぢや。日本にもこう云うものがあるかな。…大変便利ぢや。…君達も考へて作ってみなさると好えぢや』。その後、庸三はイギリス人宣教師が盲人に聖書を教えるという主旨で発足した楽善会に入会（1877年）し、下賜金と寄付金、それに民間のボランティアを頼りに訓盲教育を開始した。この東京訓盲院が後の筑波大学附属盲学校と同聾学校になった。これが我が国の特殊教育の創始である。

人における残存聴力の重要性の理解が進んだのは19世紀の終わり頃である。最初の電気増幅による補聴器ができたのが1900年（ウィーンの臨床家Ferdinand Alitによる）であるから、庸三の時代にあつては聴覚を活用する以前に、啞者でも教育すれば手話ができるとまず考えたのは自然なことであろう。21世紀の現在、補聴器の性能が向上し、聾学校には人工内耳を装着する聴覚障害児も増加している。当然、聴覚医学・社会福祉・聾者の世界などとのすり合わせを通し、教育の方法も変化してくる。オージオロジー

の分野では、聞こえるか聞こえないかだけを問うのではなく、誰しも生活の中で聴きたい音、聴く必要があると思う音はあるはず、それなら、どういう教育の方法をとろうとも、聴覚を塞ぐ理由はないと考

えるようになった。聴覚障害児の日本語の習得をめぐり、我が国でも様々なアプローチが行われている。現行の教育法に徒に黒白をつけるのではなく、今、現場にできる取り組みや工夫は何かを常に発想する態度が大切になってくる。

政府の構造改革のもと、教育の改変が叫ばれ、法人化して早三年、財政難は今も変わらない。しかし、高度なテクノロジーが活用できる時代になった。附属聴覚特別支援学校は、日本の来るべき姿を見据え、聴覚障害児の社会自立とQOLの充実を支援するための教育法の実験・実証学校である。庸三が傾けた直向きな情熱を失ってはならない。



遠藤謹助 井上 馨 井上 勝 伊藤博文 山尾庸三
(イギリス留学中の長州藩士)

私の学校の 名物先生 vol.8

附属高等学校の名物先生 —渡辺雅之先生—

附属高等学校副校長 高澤耕一

「名物教師」の烙印(?)をどなたに押すべきか、とても困りました。個性豊かな先生方の中から、今回は、渡辺雅之先生をご紹介します。

渡辺先生のご専門は国語(漢文)です。中国の歴史や文化に大変お詳しいばかりでなく、古典落語の世界にも広範な知識をお持ちです。何しろ学生時代から寄席通いをされて、その道にも、と迷いすら生じたことがあるというお方ですから、話術にかけては玄人はだし。

授業では深い漢文の素養に裏打ちされた雄大な中国の歴史・文化と思想を学習する中に、笑いや感動に涙ありの授業が展開されます。ある時、あるクラスの茶目っ気のある生徒が、授業の始まる前に、教卓の上に座布団とお茶を用意したことがありました。ナベさん(渡辺先生のあだ名)、思わず一席! これまた名演で、その後の授業の乗りは絶好調。クラス保護者会などでも大活躍されて、笑いずきでお腹が痛くなるお母さんが出る始末。ナベさんの“一席”を楽しみに来る保護者もいるとか。

中国語も堪能で、中国から来校した教員や高校生の通訳もこなされるなど、学校は大いに助けていただいています。

校務分掌では、教務部長と総務部長を歴任されています。それだけ、先生方からの信頼が厚く、仕事を正確に処理するだけでなく、全体を見渡して的確な指示を出されたり、先行きを見通す力を備えています。現在は、教務部で主として学年暦の作成など豊富な経験を生かされて、精微なお仕事をされています。

渡辺先生は高校生の時はバレーボール一筋。セッターとして活躍されたと同時に、後輩には鬼コーチとして有名。高校の時にみっちりしごき抜いた後輩が、現在附属高校の体育科の教師であり、バレー部の顧問という奇遇。そういえばナベさん、秋のスポーツ大会のクラス対抗戦の練習にかり出され、クラスの生徒のスパイク練習に付き合い、一生懸命トスを上げていましたっけ。





次長に就任して

附属学校教育局次長
石隈利紀

4月に次長に就任しました。簡単な自己紹介、私と附属学校との関わり、そして附属学校の今後についての所感を述べたいと思います。

私は平成2年9月に筑波大学に赴任しました。最初の担当は保健管理センター学生相談室でした。学生の学業生活の悩み、恋愛・失恋の悩み、進路の悩みを聞きました。平成8年大塚地区に移り、夜間大学院カウンセリング専攻の担当になりました。現場の実践家（学校の先生、カウンセラー、起業の人事担当、看護師〔当時〕、ソーシャルワーカーなど）と共同研究する楽しさを知りました。

そして平成13年4月より附属学校教育局（平成13～16年は学校教育部）の担当教員になりました。今年で7年目になります。これまで附属学校の先生方とは教育相談やプロジェクト研究（「学校生活とメンタルヘルスのサポートシステム」、「ライフスキルを育てる心理学の授業」、「高大連携によるキャリア教育のあり方」）、連携委員会等を通して、一緒に仕事をさせていただいております。

私が感じているのは、附属11校それぞれに、歴史があり、文化があり、持ち味があるということです。各校の持ち味は、研究テーマや研究紀要に言語化されているものもあれば、感じることはできても表現されていないこともあるようです（もったいない!）。もう一つは、附属学校に通う幼児・児童・生徒及びその保護者が多様であることです。外から見ると「附属」というイメージでとらえられますが、先生方は今日の多様な生徒たちや保護者の方々と、とまどいながら、ていねいに工夫しながら関わっておられると思います。

私は、各附属学校の個性、及び生徒たち・保護者の多様性に、附属学校の将来性を見ることができると思います。公立の学校も個性を発揮することが求められている今日、附属学校の個性的な教育の実践は大変参考になると思います。そして生徒たち・保護者の多様性に応えることは、日本の学校教育が直面している課題です。ひょっとしたら附属学校は、各学校の個性が強いだけに、学校の文化と折り合いの悪い生徒が大きな苦戦をするという可能性もあります。この点においても、附属学校は学校が個性的な持ち味を発揮しながら、多様な生徒たちにどう関わっていくかについての知見を発信できると思います。

私は、指導教員として次長としての役割は、コーディネーター（つなぎ役）であると思っています。個性的な附属学校が、附属学校同士、筑波大学と、社会と、どうつながっていくか…これが、今日の附属学校の課題です。またそのために、教員と事務の方々と協働が鍵を握ります。私は、筑波大学の附属学校は日本の学校教育を次のステップへと進める力を持っていると思います。つなぎ役として頑張ります。どうかよろしくお願いいたします。

指導教員の取組み1

一步一步

附属学校教育局 生田 茂

附属学校教育局にお世話になり間もなく二年になります。29年間お世話になった東京都立大学、コミュニティ活動をやっていた多摩を離れ、そして、教育に関わることは、小生のこれまでの人生にとって「最大の転機」でもありました。

幸いにも、科学研究費基盤研究(B)や二つの産学共同研究をいただくことができ、附属学校のみなさんと共同の取組みを開始することができました。地域で授産施設「かたくりの会」の後援会長をしていますが、実際に、桐が丘養護学校や大塚養護学校を訪ね、小さなツールを持ち込んで子どもたちの学び合い、育ち合いの支援に取り組むことができ、大変嬉しく思っています。

附属学校の先生とともに学会に出かけたり、論文としてまとめることにより、研究成果を積極的に発信しようと心がけています。八王子市の小学校の先生、新宿日本語学校の先生、国立リハビリテーションセンターの先生とも共同研究を行っていますので、交流し、学び合えるようにと考えています。

みなさんに温かく迎え入れていただき本当に感謝をしています。これからも附属学校を訪ね歩き、みなさんに声をかけさせていただきますので、宜しくお願いします。

指導教員の取組み2

Whole school approach

附属学校教育局 篠原吉徳

今日、諸外国の中で、特に英国が有名ですが、全学的アプローチ（whole school approach）がとられる学校では、特別な教育的ニーズのある子どもに限らず、すべての子どものニーズに応えることができるように学校の環境を整えることに、全教職員が責任を負うことが求められています。もっとも、これ自体は、特別なことではなく、学校として、また教員として、当然の務めである、と思われるかもしれません。しかし、全学的アプローチがとられる学校においては、殊に特別な教育的ニーズを満たすために、カリキュラムが改められることもあります。通常の学級では、教育内容の修正が施されたり、特別なツールが使われたり、さらには、新たに指導技法が適用されたりします。そしてまた、教員の協働による教育も追求されます。リソースルームで働く教員は、通常の学級の担任とともに、特別な教育的ニーズのある児童生徒の指導に当たります。

日本においても、特別支援教育が始まった今、「校内委員会」のイニシアチブで、各学校で全学的アプローチによる取り組みがなされるべきである、と考えられます。導入に際し、全学的アプローチが機能するようにするためにはどのような配慮が必要であるのか、日本の学校の精神風土に合わせ、全学的アプローチを改善するとしたら、それはどのようなことか、を明らかにしたい、と思っています。

全学的アプローチと個別の教育支援計画は、特別支援教育を支える重要な要素です。全学的アプローチが採られる中で、特別支援教育の推進に役立てられる個別の教育支援計画のあり方の検討を、併せ、行います。

朝永振一郎記念「科学の芽」賞

附属駒場高等学校副校長 小林 汎

昨年、筑波大学で、朝永振一郎博士生誕100年記念事業が行われた。その「青少年プログラム」の一環として、附属学校教育局が中心となり、朝永振一郎記念「科学の芽」賞の取り組みが行われた。

“ふしぎだとおもうこと、これが科学の芽です。よく観察してたしかめ、そして考えること、それが科学の茎です。そうして最後になぞがとける、これが科学の花です。”という朝永先生の言葉から生まれたのが「科学の芽」賞である。

当初、果たして応募作品が集まるか心配されたが、谷川教育長を先頭に、関係者の努力で645件の応募があった。12月23日、筑波大学での表彰式・発表会には、岩崎学長、副学長、受賞者の家族を含めて100名以上の参加があり、素敵な「クリスマスプレゼント」となった。

今年、幸いなことに第2回目が継続して実施できることになった。より幅広く呼びかけて、筑波大学にとって重要な事業として発展させたい。科学好きの子どもたちが育って「理科離れ」がなくなるような、そんな夢を持って取り組みたいので、皆さんのご協力をお願いしたい。



《編集後記》

平成19年度より、特別支援教育がスタートしたのにあわせて、本学の附属学校においても、様々な取り組みがなされています。これまで日本の特殊教育を担ってきたともいえる本学附属の特殊学校は、特別支援学校と名称を変更し、盲学校は視覚特別支援学校、聾学校は聴覚特別支援学校、桐が丘養護学校は桐が丘特別支援学校、大塚養護学校は大塚特別支援学校、久里浜養護学校は久里浜特別支援学校になりました。また、本号にも紹介されているように、附属特別支援学校新生プランが出され、特別支援学校として新たな道を進むための検討が、現在、精力的にすすめられています。

一方、特別支援学校以外の附属学校においても、特別支援教育を推進するような取り組みが行われつつあります。特別支援教育は、通常学校に在籍する支援の必要な児童・生徒のための教育でもあり、通常学校の改革も伴っています。本学に11ある附属学校が、互いに協力しあいながら特別支援教育を進めていくことができれば、支援の必要な児童・生徒にとって、これほど素晴らしい学校はないと思います。理想的な教育環境が整えられるよう、少しずつ前に進んでいけたらと思っています。（菅野和恵）

ポローニア
paulownia

vol.9

発行日……平成19(2007)年5月31日

発行者……附属学校教育局教育長 谷川彰英

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
ポローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

編集委員長……江口勇治

編集委員……生田 茂・田中輝美・菅野和恵・下山晃司
青山由紀・間々田和彦・大村覚男

デザイン……スピーチ・パルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-Irimax mm [日本製紙]